No.72
2017. 9. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■新理事長就任 …… 1
■前理事長にインタビュー …… 2,3
■新しい理事の皆さん …… 3
■支援地から　ネパール・カンボジア・ラオス …… 4,5
■多文化共生社会を目指して …… 6
■わくわくワークショップ …… 6
■気仙沼だより …… 7
■地球の木と私 …… 7
■活動日誌 …… 7
■INFORMATION …… 8
■編集後記 …… 8

― 新理事長に 堀 千鶴さん ―

会員の皆さまの思いを形に

私が、会費を払うだけの会員から一歩踏み出して、地球の木と深く関わるようになったきっかけは、ネパール・パートナーNGOのニルマラさんとシュレスタさんの来日(2000年)でした。湘南地域でフォーラムが開催され、お寺の境内で懇親会をしました。シュレスタさんには我が家にホームステイしていただき、近所の友人たちと立ち上げた「リサイクルショップひまわり」と「デイ・スペースひまわり」にもご案内し、スタッフや利用者の方たちと交流しました。それは、私たちのその後の活動にとって画期的な出来事でした。

2000年、地域の中で見えてきた課題を解決しようとスタートしたリサイクルショップが利益を生むようになり、その収益をどのように社会の役に立てようかという話し合いの中で「地球の木」のことを思い出し、アクセスしてみました。丁寧な対応に共感を覚え、寄付をするだけでなく、もっと知りたいと思い、ネパールチームの会議を傍聴させてもらいました。熱のこもった議論に戸惑うこともありましたが、毎月参加して、地域で報告し続けました。やがて、地域の人々の間に理解が広まり、寄付金も集まるようになりました。ひまわりでのシュレスタさんとの交流が私たちの活動に拍車をかけてくれたのだと思います。

気が付くと地球の木の理事になっており、2011年の東日本大震災の後、復興支援を担当することになりました。地球の木が海外支援で培ってきた「地域に暮らす人の思いを大切に、寄り添っていく」という考え方を基本に、現地に何度も足を運び、話し合いを重ねました。復興支援では、本当に多くの会員の皆さまのご協力をいただきました。自らも被災した若者グループTree Seedを立ち上げ、未だに避難生活を余儀なくされている気仙沼の方々への支援活動は、現在に至っています。

近所の人とのお茶のみ話で、ふと口にした問いかけに「私もなのよ」と同意してくれた仲間がいて、「それなら一緒に調べてみましょう」と行動を開始した、こんなたわいもない出発点から、同じアジアに暮らす女性たちの困難な状況を知り、私たちに何かできることはないかと議論をしている内に、私たちの世界はぐ～んと広がりました。

地球の木設立から26年、世界はグローバル化の一途を辿り、貧富の差は広がるばかり。温暖化は止めようもなく、集中豪雨のニュースが日々、新聞・テレビを賑わしています。政治の腐敗は、覆いようもなく、私たちは、未来に何を残すべきか、考えさせられます。こんな時代だからこそ、未来に希望を持てるような社会を子どもたちに残したいと思いませんか。これまでの、地球の木の歩みを一歩ずつではありますが、確実に前に進めて行きたいと考えています。

地球の木は、活動を共有する現地パートナーやJVCと共に、会員の皆さまの思いを形にしていくことに力を注いでいます。これからも会員の皆さまのご理解とご協力をいただきながら、アジアに暮らす女性や子どもたちと幸せを分かち合うべく力を発揮してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

（理事長　堀 千鶴）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会　■発行責任 堀 千鶴　■編集 会報作成チーム　■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575　■FAX 045-228-1578　■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp　■http://e-tree.jp/

丸谷士都子前理事長にインタビュー

「いろいろな人と出会いました。そして皆さんの協力があったから」

理事長として14年間地球の木をリードし、このほど退任された丸谷さんに会報作成チームでいろいろな話をうかがいました。

―― 2003年の理事長就任の挨拶（会報15号）では、ジョン・レノンの“Imagine” の歌詞を引用しながら、「みんなが平和に暮らしていく世界を」と。そして「共に生きるとはどういうことかを考えていきたい」と語られています。今どんな風に思われていますか？

丸谷 わーっ、14年前の会報誌にそんなこと書いてたんですね！ 確かに「共に生きる」をテーマにしてきたと思います。当時支援は、可哀そうだからとか、自分たちに余裕があるから少し分けてあげるという考え方もありましたが、ちょっと違うと思いました。「共に生きる」という姿勢の中から、どんな支援の仕方がいいのかを支援先の人たちから学びました。人って、文化や風習は違うけど、同じ人間であるというところからスタートしないといけないと思うんですね。あーすフェスタなどの活動の中でも外国籍の人たちと活動を共にし、「共に生きる」ことについて学びました。

―― 長い活動の中で印象深いことはいろいろあったと思いますが、どんなことが？

丸谷 初めのころですが、地球の木オリジナル開発教育教材「マジカルバナナ改訂版」の作成のために、フィリピンのネグロス島へ行きました。現地の人と「マジカルバナナ」のカードゲームをしたのですが、実際にバナナを作っている人たちが「そうだ、その通りだ」ととても喜んでくれて、バナナ尽くしのいろいろな御馳走で歓待してもらったことがとても楽しい思い出です。ネパールのマンガルタール村でも「マジカルバナナ」をしました。村人の家の裏庭にはバナナがなっているんですが、「バナナはとても栄養価が高い」と知って、みんなびっくりしたり、喜んだり。村長さんが「これは農薬を使っていないバナナです」と得意そうにバナナを沢山出してくれました。両方とも印象深い出来事でした。地球の木は現地に行くことを大切にしていますが、現地に行って、実際にそこの人たちと話をする大切さがよく分かりました。支援地の人たちの気持ちや自尊心などが見えてくるんですね。

―― 任期中いろいろな大災害にも対処して来られましたね。

丸谷 まずは2004年のスマトラ島沖地震でした。緊急支援をすることになり、スリランカの漁師たちが現地の材料で仮設の家を作り利益も得られるというPARCのプログラムへの支援を行いました。地球の木が大切にしてきた「自立するための支援」です。その後もパキスタン地震やハイチ地震などの支援を行いましたが、そういう積み重ねの中で、地球の木の支援は「必要な場所にちゃんとした支援をしてくれる」という信頼を得ていったと思います。

東日本大震災では、私はどうしようとオロオロしてしまいましたが、迅速に行動するメンバーたちに大いに助けられました。私も現地を見なければ分からないと5月に気仙沼に行き、後にTree Seedを結成した若者たちに出会いました。そのあと炊き出しをした時の痛い思い出なんですが、いかに大勢の人たちに食事を提供するかに重きを置いていたので、調理し易いスープとパンの炊き出しをしようとしていました。すると直前になって「パンでなくご飯を」とすまなさそうに連絡がありました。ご飯が食事で、パンはおやつだったんですね。同じ日本でも食文化の違いがあることや人との対話の大切さを知りました。国内でもこの通りなのですから、海外の人とはよくよく話し合いをし、相手を尊重しなければならないと痛感しました。

ネパール大地震では、現地パートナーのSAGUNが素早く動いたので、地球の木も早くに支援活動をすることができました。関連団体も支援をしてくれて、地球の木の支援に更に信頼が増しました。

―― 活動されてきた中で、これは成果かなと思われることは？

丸谷 持続可能な開発という観点から「世界の人たちと分かち合う」そして「次の世代の人たちと分かち合う」という考え方を基本に据えることができました。支援する側が期間を決めて行う「プロジェクト」からずっと村に寄り添っていく「プログラム」という名称を使うようにもしましたね。神奈川県内の様々な団体との新しいネットワークを作ったことも成果の一つでしょうか。

―― 反対に、思うようにいかなかったことはありましたか？

丸谷 予算規模が小さいので現地の希望をかなえられず、もどかしさを感じることがありました。活動する人材の不足もあり残念ながら限界もあることを知らされました。

―― 会員を増やしたり活動に参加してもらうにはどうしたら良いと思いますか？

丸谷 会員の中にはいろいろな人がいるので、埋もれた人を発掘できるといいんですが…。

フェアトレードに関心がある人が多いと思うので、その意義を伝え、仲間を増やすことができるでしょう。 あとスタディツアーは大きなインパクトがあり、生き方が変わるくらい深い学びがあるので、ツアーを実施する地域も増やし、もっと参加者が増えれば、若い人も取り込めるし効果的だと思います。

―― これからの地球の木に望むことはどんなことでしょうか？

丸谷 新理事さんも増えたので、新しいネットワークで新しい層を取り込んで、リフレッシュしていただけたら嬉しいです。そして現場での経験を積んでほしいなと思います。今までの地球の木の歩みを大事にしながら、でもそれにとらわれずに、それぞれの得意分野を生かして充実した活動を行っていってほしいと思います。

会報作成チームの皆さんの伝える力にも期待していますよ。

（会報作成チーム／文責　沼田由美子）

新しい理事の皆さん、よろしくお願いします

五十嵐 仁美

25年ぐらい前、当時私は生活クラブに加入したばかり。地球の木の方たちは日本の事だけではなく、海外、特にアジアや女性など現地の方たちに寄り添い、人々の自立に向けて地域づくりを支援している。地球の木の活動内容を聞き「すごい方たちがいるものだ…」と感心したことを覚えています。今回初めて理事として関わることになりました。今の社会情勢はどうでしょうか？数日前に5人目の孫が産まれました。未来に向けて少しでも良い社会を築いていけたらと思います。

大嶋 朝香

現在、NPO法人ひらつかエネルギーカフェ運営委員。原発事故後、飯館村の女性たちとの交流、応援もしている。1ヵ月のうち10日間位は岩手・一関で雑草と格闘。今期から地球の木理事となり、寄付のみの会員から1歩踏みこんだ立場となった。地球の木が国際協力で培ってきた成果を実感したい、そしてこれから求められる市民レベルの協力について考えていきたい。国内外を問わず地球の木がめざす流れにいる人たちと共に行動したい。

植田　泉

地球の木は、今、様々な状況の変化の中で、新たな方向性を見出さねばならない時であると考えています。これからの2年間、理事として多くの方の意見を伺いながら議論を深めて行ければと楽しみにしています。ここ数年はクラフトチームメンバーとして、主にカンボジアのシルク製品等のフェアトレードに関するお手伝いをしてまいりました。今年度はクラフト担当理事として新たな視点から継続させていただくことを嬉しく思っています。

廣瀬 康代

また理事になりました。以前は、フィリピンのプロジェクトの担当をしていました。ネグロス島を拠点に、砂糖キビ労働者の自立支援をしながら、フィリピンの情勢を学び、自分たちの生活を見直す活動に力を入れていました。これからも、持続可能な社会を次の世代に受け継いでいく活動をと思い、楽しく、たくさんの方と関わりながら活動したいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

from Nepal

幸せを運ぶヤギ

ナマステ！SAGUNのマハンタ・バブ・マハルジャンです。今年度から「幸せ分かち合いムーブメント」のプログラム・コーディネーターとして、支援地域と地球の木の皆さまをつなぐ役割を担っていきます。どうぞよろしくお願いします。今号では、マンガルタール村で行なっているヤギの飼育プログラムについてご報告します。

2015年4、5月のネパール大地震で98%の家屋が損壊したマンガルタール村では、未だ仮設シェルター暮らしを続ける家庭が多く、住宅再建のための、より効果的な収入創出が必要となりました。

「幸せ分かち合いムーブメント」のプログラムは、村人たちとの話し合いから始まります。村人で構成される委員会が村人たちに呼びかけて話し合いが持たれました。マンガルタール村には飼い葉と放牧地が豊富にあるので、ヤギの飼育が最も適した収入創出の手立てであるという結論に達しました。ヤギの肉はネパールでは最も高価で、お祭りの時に食べるごちそう。それに、ヤギは最低2頭の子ヤギを生むので、1年後にはヤギ1頭（または現金）を次の参加者に提供することができ、持続的に対象者を広げていけます。

次は、農家選出のための基準作り。話し合いの結果、選出基準は、①経済的に困難な家庭、病気の人、70歳以上の単身者、障がい者のいる家庭②ヤギの飼育に関心があること③生まれたヤギを1頭返却することに同意するという3点に絞られ、10世帯の農家が選出されました。

続いて大事なのが、グループ作り。これまでの支援で、グループのメンバーとの話し合いや助け合いがプログラム成功のカギを握っているという事例を度々見てきました。貯蓄グループも結成され、良いスタートを切ることができました。

12月のオリエンテーションで、ヤギの品質や適正価格について学んだ参加者たちは、自分たちでヤギを購入します。多くの参加者が地元産のヤギを買うことにしました。それは、地元のヤギの方が、環境への適応力が高く、リスクが少ないからです。1頭買った家もあれば、2頭買った家もあります。「え～、トレーニングを受けるの？ヤギの飼育なら分かっているのに」と言っていた人も、トレーニングでヤギ小屋の作り方、餌の与え方、予防注射の重要性、病気への対応、保険に関する知識などのトレーニングを受けた後、「知っているつもりが、知らないことが一杯あった！」と、学ぶことがたくさんあったようです。

モニタリングの結果、「2頭買ったヤギが5頭になった！」と喜びの声も。90%の家庭で、ヤギの数が2倍になりました。これからも、村の人たち、そして、地球の木の皆さまと幸せを分かち合っていきたいと思います。

（SAGUN　マハンタ・バブ・マハルジャン）

2匹買ったヤギが5匹に増えました！

マハンタ・バブ・マハルジャンさんは、地球の木のパートナーSAGUNの理事。ブラジルの教育者、パウロ・フレイレの影響を受け、参加型手法を成人教育に取り入れて実践する。専門分野は、教育・村落開発・人権・ジェンダーなど多岐にわたる。

from Cambodia

CWCC訪問

6月29日から7月3日までプノンペンを訪問しました。

CWCC（カンボジア女性緊急救済センター）支援プログラムは今年度で3年目になります。その支援内容は、①新しい生活を始めるための支援（台所用品、米、毛布などの供与）、②仕事を始めるための助成金、③医療ケア、④職業訓練、⑤シェルター滞在中の食費、となっています。CWCCが運営するプノンペンの保護シェルターには昨年10月から今年7月までの期間にDV、レイプ被害者など41人とその家族28人が滞在しています。

前回、今年3月に訪問した際、地球の木の支援により、新しく仕事を始めたサバイバー（※）に話を聞きたいという依頼をしていましたが、今回その手配をしていただきました。

私たちが訪れたプノンペン郊外に住むサバイバーはまだ、10代で学校にも通っていますが、青菜の漬物を作り、それを市場で販売するという仕事をしています。家族で間借りをしているという大きな家の片隅の薄暗い中で、市場から仕入れた高菜のような青菜を塩と唐辛子などで漬け込んでいました。週の内、3日程は漬物を作り、何日かは市場に売りに行くとの事です。私たちの質問に対してもおだやかに少し恥ずかしそうに対応してくれました。

今回は会えませんでしたがサトウキビジュースの販売、野菜の栽培・販売などの仕事を始めるサバイバーもいます。

その後、プノンペン市内のシェルターを訪問しました。CWCCのディレクターに支援金を手渡し、「地球の木の支援金のように日常的なシェルターの食費等きめ細かい対応が可能な支援金は有難い」と伺いました。支援金の使用状況の詳細な報告書も受け取り、決して大きな支援金額ではありませんが、被害者の女性に寄り添った地球の木らしい支援であることを確認できました。

同行したスタッフの竹内さんと共にシェルター施設内を見学し、職業訓練など実施しているプログラムの説明を受けました。好奇心旺盛な子どもたちともふれあい、状況の聞き取りも行いました。元気に学校に通ってはいるものの、やはり心に傷を抱えている状態ではうまくいかないことも多く、学校でのトラブルは絶えないとのことです。

漬物づくりをするサバイバーの女性

CWCCでは心理の専門家によるカウンセリングなどの対応を行っているが、それだけでは足りない、とスタッフから課題も聞けました。

2016年度に引き続き、2017年度も自立支援を含め確認された5項目の支援を継続して行います。今後ともカンボジアの女性たちの状況を見つめ、支援の在り方を考えていきたいと思います。

（理事　植田 泉）

※生き残った人々というのが元々の意味。このシェルターに保護された人等、虐待など様々な困難な状況にあいながら、生き延びている人のことをいう。

from Laos

新規プロジェクトが始まります

9月頃開始予定の新規プロジェクトは、森林保全や農村開発を通じた村人の安定した生計の支援という大枠では従来と変わりませんが、その進め方や手法については様々な違いがあります。まず、対象村の数を従来の2郡30村から2郡10村に大きく減らしました。これまでは、ラオス政府の意向で活動村の数が多く、A村ではこの活動、B村ではこの活動、というふうに、方向性は同じ枠内ではありつつ、ややパッチワーク的に30村が網羅されていました。10村に絞ることで、今後は全ての村で参加型土地利用計画（※）を行い、そこでの話し合いや調査を通じてその後の活動について話し合っていきます。それによって、例えばこれまで「この活動を行うニーズが高く、行うのに適した村は、この30村の中でどこだろう」という視点だったものが、「この〇〇村にはどんな活動が必要だろうか」という視点で村を見ることになります。

また、人権意識啓発にこれまで以上に踏み込んでいくことも新規プロジェクトの特徴です。その概念的支柱の一つが、RBA（Rights Based Approaches＝人権アプローチ）です。権利と義務は一体、とよく言いますが、RBAでは、「おやつが食べたければ先に宿題を」という意味での「権利と義務」ではなく、権利を有する「権利保有者」と、その権利を守る義務を負う「義務履行者」に着目します。例えば学校に通えない子どもは「かわいそうな子ども」ではなく「権利が侵害された権利保有者」と見なされ、同時にそれは「義務履行者の義務不履行」を意味します。ですので、権利保有者である村人への働きかけに加えて、主要な義務履行者である行政官への働きかけも重要になってくるため、彼らとの協働の拡大と強化も新規プロジェクトの特徴となります。

義務履行者には、場合によりますが、村人自身、村長、郡の行政官、その地域で活動するNGO、その国の政府、国連、諸外国の政府・国民…つまり、義務の重さの差はあっても、地球に暮らす全ての人々が含まれます。新規プロジェクトにおいても、よりよいラオスの、そして地球の未来のため、みなさんとともに歩んでいければと思います。

これから始まる新プロジェクトよろしくお願いします

（JVCラオス事務所　平野 将人）

※GPSなどを用いて村の境界を決定したのち、境界内の土地を利用目的によって農地、利用林、保護林、などに区分した地図を作成し、必要に応じて各区分内の規則を策定する活動。

多文化共生社会を目指して

5月28日総会後、在日カンボジア難民を支えるCCJ(在日カンボジアコミュニテイ)理事の伊藤裕子さんと、36年前に難民として来日、今は伊藤さんの右腕となって活躍している萩原カンナさんをゲストに迎えて講演会が行われました。

神奈川県にはカンボジア人が多いという。これは大和市に難民定住促進センター(1980年)ができたことに起因する。1975年、インドシナ三国で次々に政変が起き、多数が難民として母国を離れた。この日のゲストのカンナさんはポル・ポト政権下で両親を亡くし、10歳の時、親戚と共に日本に逃れてきた。難民の人たちはセンターで数ヵ月間、日本語教育を受け、住まい、仕事を斡旋されて日本に定住してきた。

彼女は同センターの一期生。頼る人のいない中、懸命に日本語を覚え、日本語ができない親戚や知り合いのため、生活上必要な書類作成などの助けをしてきた。小学生ながらに「主人が……」などと手紙の代筆もしたとのこと。思わず会場から笑い声が上がったが、皆の期待を一身に受け、それに応えてきたカンナさんの健気さに胸が熱くなる。しかしその経験が入国管理事務所や裁判所の通訳という、今の仕事に結び付いた。

短期間の訓練では難民たちの日本語能力に限界があり、就く仕事は限られる。生活の為に必死で働かざるを得ず、子どもの教育、どう育てるか、ましてや母語教育にまで思いが至らない。日本で育った子どもは日本語、親はクメール語を話すために親子の意思疎通が難しい。早婚の風習もあり、結果、上級学校への進学を阻み、必然的に子どもたちの仕事も限られるという悪循環に陥りやすい。来日して何十年も経つと、年金、墓地の問題など次々と起きる。伊藤さんはその解決に奔走する日々だ。

今年で3回目を迎えるというカンボジアフェスティバルは、難民の負のイメージを払拭し、復興した祖国を日本人に知らせる。また在日カンボジア人には、がんばっている同胞の例から将来に向けてのより良い仕事の選択肢があることを伝え、加えてカンボジアの伝統文化を披露することによって、自分のルーツに誇りを持ってもらうための貴重な機会だそうだ。

伊藤さん(左)とカンナさん(右)

初めて難民を受け入れることになった当時の日本はまだまだ難民たちにとって住みやすい所ではなかっただろう。講演中、何度も「本当に大変なんです」という言葉が出てきた伊藤さん、必死に努力し、難民の人々の中心となってきたカンナさんを目の前にして、多文化共生という言葉さえ無かった時から今日に至るまでの彼らの苦労が偲ばれる。

(会報作成チーム　浜辺 美英子)

ネパール わくわく ワークショップ

アジアの国を知ろう!

このワークショップは、地球の木が国際協力しているネパールやラオス、カンボジアのお国柄を理解することで、地球の木の活動を普及し、新しい仲間を増やしていこうという目的で行われます。

第1回は「ネパール」で、7月1日(土)東戸塚みんなの居場所「お茶の間楽交(がっこう)」で開かれました。この日は、ネパールチームの丸谷さんと2015年から日本に留学中のリタ・タパさんが講師を務め、参加者(8人)がネパールの暮らしに触れるワークショップを体験しました。ヒマラヤにつながるネパールはインドと中国に接していて多民族、多言語国家であり、文化や宗教なども多様性に富んでいる国であることを知り、イメージが少し鮮明になりました。

それから、ネパールで普段使われている道具を実際手に取り、使途をあてるワークショップでは、参加者からの回答はいささか的外れで、リタさんから使い方を聞いて、楽しい想像が膨らみました。

その他、識字教室のことやネパール大地震被害者支援のことなども説明を受け、最後はリタさんに合わせてダンスも体験し、ネパールをひととき訪れてきたかのような時間を過ごしました。

みなさんのお住まいの地域でも開催してみませんか。

(理事　大嶋 朝香)

気仙沼支援報告

気仙沼だより その18

――復興の状況を見に来て下さい

ようやく、撤去が始まった学校敷地内の仮設住宅

現在、Tree Seedの一番の活動は、ボランティアや東日本大震災以降の経過調査の方々の宿泊休憩場所の提供です。ボランティアの人たちは、現在ほとんどいませんが、震災後ボランティアに来ていただいた人たちが、現在も気仙沼を一緒に盛り上げようと活動をしています。イベントの手伝いや、お祭りの参加など、被災した人たちや観光、商業など色々な分野での盛り上げ方をして、私たちも感謝しています。

また、震災後調査については、人々の流れや、住宅の状況、新しいコミュニティなどの調査が多く、私たちも、仮設住宅の情報やコミュニティの情報を交換しながら活動しています。今まで数多くの支援、応援をいただいておりました、仮設住宅や復興住宅への移動販売及びコミュニティの形成の活動は終了しました。おかげさまで、完全ではないものの、仮設住宅から復興住宅への移動はほとんど終わり、復興住宅付近の生活環境もだいぶ整ったのが理由です。皆さまのご支援、応援ありがとうございました。

現在の活動の主な内容は以上ですが、現在、気仙沼市を盛り上げるために、いくつかの活動を計画しております。早く、皆さまへご報告できるよう今後とも頑張っていきますので、気仙沼市及びTree Seedの応援よろしくお願いいたします。

また、皆さまが、気仙沼市へ来ていただくことを心から楽しみにしております。そのときは、私がガイドをいたします。一緒に活動していた場所の復興の状況を確認していただければ嬉しいです。

（Tree Seed　小野寺 大志）

地球の木と私

伊豆に移住しての小屋暮らしも1年8ヵ月となりました。それまでは、フィリピンやネパールの支援プログラムに、また「たうんチーム」の活動に参加。主婦主流の地球の木の中では「生活クラブ」も知らなかった貴重な（？）存在だった私。そのもっと前には中年のバックパッカーをやっておりまして、その際、いろいろな国で生活者に接するわけですが、相手から見ると「どこの馬の骨」（馬の諸君ゴメンネ）と思われていました。それが地球の木の支援地では模範的な人間のように接してくれることが多いのです。「ただの変人」の私としましては、何だかギャップを感じていました。

こちらでは自然栽培にて野菜を育てようとしていますが、なかなかうまくいきません。この地は溶岩台地なので、地面を少し掘ると石がザクザクと出てきて、みるみるうちにケルンが出来上がります。大物に当たると私の力ではテコでも動いてくれません。ここらの家の境界に積んである石はほとんどが敷地内から出た石で、地元ではボクイシと呼ぶようです。建築用に使われる伊豆石や江戸城の石垣に使われた安山岩系の石。伊豆半島には全国の藩が切り出した石切り場がたくさんあります。港まで石を運びおろす危険で大変な作業にはたくさんの人が人足として動員されたはずですが、詳しいことはよく分からないようです。以上、「地球の石」のお話を一石。

（伊東市　米林 大作＋忖度ライター）

活動日誌（6月～8月 抜粋）

6月

1・2日　デポー展示会（ほんもく）
4日　ふくしまつり（磯子）
7日　第1回理事会
10日　出前講座（鎌倉女学院）
14・15日　デポー展示会（南林間）
16・17日　デポー展示会（東戸塚）
22・23日　デポー展示会（宮前平）
6月29日～7月3日　カンボジア訪問（植田・竹内）

7月

1日　アジアの国を知ろう！ 第1回ネパール（お茶の間楽交・東戸塚）
3日　第2回理事会

8月

22日　アジアの国を知ろう！ 第2回ラオス（お茶の間楽交・東戸塚）
23日　デポー展示会（らいふたうん）
28日　デポー展示会（せや）

2018年版「地球の木」カレンダーができました！

◆タイトル：「Have a nice day!」
◆写 真 家：長倉洋海氏
◆価　　格：壁掛け：1,600円（税込） 卓上：1,300円（税込）

ネパールスタディツアー2018

～支援地を訪ねるふれあいの旅～

地震から復興しようとする少数民族の村でもホームステイし、人々の暮らしや生きる知恵から学びます。

■日 程：2018年2月23日（金）から3月4日（日）10日間（機内2泊）
■主 催：風の旅行社
■現地プログラム企画：地球の木

デポー展示会

9月21日（木）・22日（金）	ひらつかデポー
28日（木）・29日（金）	相武台デポー
10月2日（月）・ 3日（火）	せやデポー
12日（木）・13日（金）	たかつデポー
19日（木）	東戸塚デポー
30日（月）・31日（火）	緑園デポー
11月6日（月）・ 7日（火）	みたけ台デポー
27日（月）・28日（火）	宮前平デポー
29日（水）・30日（木）	のぼりとデポー
12月8日（金）・ 9日（土）	つなしまデポー
11日（月）・12日（火）	東寺尾デポー

イベント情報

藤沢市民まつり
9月23日（土）9:30～16:30
場 所：秋葉台公園
活動紹介、クラフト販売で参加

ひらつか市民活動センターまつり
9月24日（日）10:00～15:30
場 所：ひらつか市民活動センター
活動紹介、クラフト販売で参加

よこはま国際フェスタ2017
10月7日（土）、8日（日）10:30～16:00
場 所：グランモール公園（みなとみらい）
活動紹介、クラフト販売で参加

なか区民活動センター祭り
10月8日（日）10:00～16:00
場 所：なか区民活動センター
活動紹介、クラフト販売で参加

かまくら国際交流フェスティバル2017
10月29日（日）10:00～15:00
場 所：鎌倉高徳院（鎌倉大仏）
活動紹介、クラフト販売、コーヒー販売で参加

WEフェスタ2017秋
11月9日（木）10:30～16:00
場 所：横浜産貿ホール1F展示場
活動紹介、クラフト販売で参加

東日本大震災・復興支援まつり
11月11日（土）
場 所：横浜臨港パーク
活動紹介、クラフト販売で参加

オルタ館フェスタ
11月18日（土）10:00～15:30
場 所：オルタナティブ生活館
活動紹介、クラフト販売で参加

筒井由紀子さんも退任

長い間、事務局長として地球の木の活動を支えてくださり、理事としてもいろいろな方面で行動力を示し、クラフト販売の道も拓いた筒井さん。残念ながらご家庭の都合により関西に転居され、退任されました。関西からこれからの地球の木を応援してください。

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE

編集後記

母はかつて紙と鉛筆を持ち歩き、スーパーで、バスで、隣り合わせた人の似顔絵を描いては進呈していた。今号、私も理事さんを描いた。PCの画面を見つめに見つめて。どの顔もその人だけのもの。部品の配置の妙。美しくて愛おしかった。（K.S）